

## 赤坂御用地と常盤松御用邸の変遷

阿部 宗 広<sup>1)</sup>

Munehiro Abe: Histories of the Akasaka Imperial Gardens and the Tokiwamatsu Imperial Villa, Tokyo

赤坂御用地は面積約 51 ha で皇居の西南西方向にあり、吹上御苑とは外周間の距離でおよそ 1.5 km 離れている。常盤松御用邸はさらにその南西約 2 km の位置にあり、面積は約 2 ha である。

本稿は、両御用地の動物の生息環境を構成する植物や池・流れなどの変遷を概観しようとするものであるが、庭園部分の変遷については具体的な資料があまりなく、以下に述べる内容には数少ない文献と図面類からの推測が多く含まれることをお断りしておきたい。

### 赤坂御用地

#### 江戸時代以前

太田道灌が 1450 年代末に江戸城を築城して以降、家康入城の頃に至るまで、江戸城の西方一帯は原野であったらしい。江戸城から西の方角を望んだ様子は、道灌の時代も家康の時にも「原野」、「萱原」などと表されている。おそらくススキの原が広がっていたものと思われるが、森や林、畑などがあつたかなど詳細な様子は不明である。

赤坂の地名は、一帯に茜（アカネ）が多かったために茜山と呼ばれたことに因んで名付けられたという説と、赤土が多かったために赤坂と名付けられた説とがあるが、もともとは一ツ木村の中の小名であったものが、後になって赤坂と総称されるようになったらしい。一ツ木村は、元は人継村と呼ばれ、徳川時代以前、小田原から発する奥州街道の宿馬継立の場であったためにそう呼ばれたと言われている。現在の赤坂御用地内の一里塚、西行井の辺りには、後述の紀州徳川邸庭園の図を見ると「古行程」、「古駅林」などの名称があり、かつての青山宿の跡との説がある。しかし、当時の宿場の広がり、土地や建物の状況等に関する記録は見当たらない。

#### 江戸時代

1632 年 7 月、初代紀州侯徳川頼宣が赤坂に中屋敷を拝領した。その後、1695 年には青山御屋敷を拝領し、1700 年代初め頃までには概ね邸の全域に近い範囲の土地が確保されたものと思われる。この紀州徳川邸がほぼ現在の赤坂御用地と迎賓館の敷地に当たる。なお、現在の高円宮邸、三笠宮邸、寛仁親王邸から巽門にかけての一帯は邸外地で、維新期においても大名屋敷や寺があつた。

邸内には北東の角（現在の迎賓館の位置）に本殿が、西南の角（現在の西門近くの広い芝生地となっている辺り）に青山御殿があり、本殿の南側（現在の東門から駐車場、赤坂東邸、官舎等の辺り）を中心に御勘定所、御金蔵、厩、鉄砲場、学問所、武芸所、御鷹部屋、江戸常府の者や和歌山から勤番の者の住居等数多くの建物があつた。

上記の建物の区域の外は庭園となっていた。庭園の設置年は不詳であるが、1642 年に頼宣に仕えた千宗左（千家四代）、千賀道圓が、命により築造したものと記録されている。1661 年に庭の模様を作り直したとの記録があることから、1650 年前後までには庭としてある程度の形は出来上がっていたので

<sup>1)</sup> 宮内庁管理部 東京都千代田区千代田 1-1

Department of Administration, Imperial Household Agency, Chiyoda 1-1, Chiyoda, Tokyo, 100-8111 Japan

はないかと想像される。早くから名苑と称えられ、参観を請う者が絶えなかったらしい。日光法親王（日光門主）、11代将軍家斉、12代家慶も参観されたとの記録がある。庭園の管理は、奉行2人が司り、路次之者（掃除係）、木登り方等が日々清掃修理、樹木伐採などに従事し、また植木屋弥助という者がいて数名で園芸を担当していたという。

宮内庁書陵部に江戸末期（天保年間と考えられる）の「紀州徳川家赤坂邸全図」があり、この図面を現在の赤坂庭園と比較しながら見てゆくと次のようなことが分かる。

敷地の中央部は西から東に下り広がってゆく谷状の地形となっていて、そこに向かっていくつかの支谷が入っており、谷の底部には後述のように水田や現在の池と似た位置・形の池があることから、全体の地形は現在と大きく変わらないものと判断される。庭園の区域は、迎賓館となったところを別にすると、概ね現在の庭園、樹林の区域に相当し、東宮御所、テニスコート周辺も庭園であった。

少し詳しく見ると、現在の大池、菖蒲池はなく、その辺りはともに五里香と呼ばれ、水田と池沼・流れがあった。五里香は放鷹地でもあったという。現在の中の池の場所には積翠(水)池という名の池があって、池の形と大きさは多少違うが二虹梁と現在も呼ばれる2本の橋が今と同じ位置にかかっていた。また、現在の心字池、大渡橋池の位置には雲英沼、青藍沼という名の形、大きさとも今とよく似た池があった。東宮御所の辺は広芝となっており、その東側のテニスコート、茶畑、元御文庫から中の池にかけての帯には花畑、桃林、菜園や丸形の堀・流れなどがあって、やや整形的な庭園となっていた。また、現在の大池・中の池の南側から心字池・大土橋池東岸にかけての山は多様な樹種の混じる樹林となっているが、当時はカエデ類、桜、松などの木が場所ごとに固まって植えられ、庭園の外周に近いところには菊畑、梅畑、いちご畑などの区画もあった。

庭園の区域内で山や斜面の地形をなしていると思われる部分は、図面では濃い緑と黄緑に色塗りされている。濃い緑は「土手平場共植込」、黄緑色は「植込無し土手」とあるが、前者は庭園の周縁部など一部に限られる。「植込」が樹林帯を、「植込無し」が樹木の（ほとんど）ない芝地のような場所を示すのであれば、この庭園に樹林が占める面積は意外に広くなかったことになるが、実際どのような植生であったかについては具体的な記録がなく不明である。

## 明治以降

1868（慶應4）年藩主が紀州に移住し、屋敷は一時期荒廃したが、明治5（1872）年以降庭園を含む紀州邸は宮内省に献上された。本殿は赤坂離宮となり、明治6（1873）年皇居が炎上して後、明治22（1889）年1月新しい皇居が完成するまで仮皇居となった。同じ年、離宮内の花御殿が東宮御所となった。この花御殿は明治32（1899）年以降解体され、一部は田母沢（日光）、小田原の御用邸等に移築（引建直し）された。また、青山御殿は明治7（1874）年青山御所となった。江戸時代には紀州邸の外であった現在の三笠宮邸の辺りから巽門にかけての帯も明治12（1879）年頃までに順次買い上げられ、御用地に含まれた。

宮内庁資料によれば、紀州邸時代の庭園は明治32（1899）年の東宮御所（今の迎賓館）起工後、ほとんど旧態を止めず改造されたとあるが、具体的にどこをどう変え、整備したかについて文書による記録は残っていない。したがって、限られたいくつかの年代の図面等により推測するしかないが、前述のように紀州邸時代の図面と現況を比較すると御用地内の地形に大きな変化はなく、改造といっても広範囲の地形の改変を伴うような大がかりな土地造成は行われていないと思われる。

図面から読み取れること、過去の状況を知る者からの聞き取りにより判明したこと等をまとめると以下ようになる。

まず、池、流れ等の水系について見てゆくと、明治12（1879）年の「仮皇居実測地図」に、現在の大池の位置に形は異なるものの大きな池があることが示されており、この時期までに大池の原形は造成されていたと思われる。しかし、菖蒲池の位置に池はなく、紀州邸時代と同じ水田であったこと

が読み取れる。明治 37 (1904) 年作成の図には、現在の菖蒲池の辺りに片側が一部くびれた楕円形の池が記載されており、菖蒲池の原形はこの時期までに作られたものと思われるが、池の大きさは現在のものより相当大きく表示されている。さらに明治 43 (1910) 年の図には、現在の中の池、大池とほぼ同じ形の池が示されており、その頃までにこの 2 つの池は現在に近い形に整備されたものと思われる。大正 9 (1920) 年の「赤坂離宮・青山御所総図」においては、かつて菖蒲池周辺に広がっていた水田は芝地らしき広場になっている。

年代が飛ぶが、昭和 35 (1960) 年より少し前、御用地内の湧水が涸れて池の水が干上がったことがあった。それ以前は、今の梅林坂を下った道路脇にあった御膳水という名の井戸から水が自噴し、水路を下って各池に順次入っていた。また権田原門寄りの谷地形の斜面からも水がしみ出し、流れとなって御膳水からの水路に合流していたという。それが涸れて池が干上がってしまい、大池は泥濘状態となり、中の池は中を歩き回れるまでに乾いたという。このため、昭和 35 (1960) 年と翌年に心字池、中の池、大池の底にアスファルトシートやベントナイトによる防水工を施している。この水涸れの原因は定かではないが、当時東京のあちこちで井戸が涸れる騒ぎがあったとのことで、土木工事や地下水汲み上げ等何らかの要因で東京の広範囲にわたり地下水位の低下があったものと思われる。なお、明治以降の池の名称は便宜上現在のものを用いてきたが、過去には違う呼び方をしていたことがある。例えば昭和 30 年代から 40 年代の頃、大池は下の池、心字池は上の池、大土橋池は大土橋上の池と呼ばれていた。菖蒲池にはひょうたん池という別名もあった。

植生の変化については、前述のように紀州邸時代の樹林は現在より相当狭い範囲に限られていたように思われるが、明治以降の図面を見てゆくと、樹林として表示・彩色されている区域が年代を追って徐々に広がっているように読み取れる。しかしながら、具体的な資料がなく、いつ頃どこに何を植栽したか等詳細は不明である。昭和 20 (1945) 年 5 月の空襲により大宮御所、東宮仮御所、青山御殿、秩父宮邸、三笠宮邸などが全焼し、同時にこれらの建物周りの樹林も焼けたが、谷部にあった庭園とそれを取り巻く斜面の樹林にまでは被害は及ばなかった。焼けた樹林の一部には戦後間もなくヒノキとスギが植栽された。

現在の西門近くの広い芝生地は、かつて青山御所のあったところである。青山御所の建物は昭和 14 (1939) 年以降、明治神宮、大連神宮、皇典研究所、東京市等に分割下付され、一部は義宮正仁親王の御殿となったが、その御殿も上記の空襲により焼失し、以後この場所に建物が建てられることはなかった。この広場は数十年前まで馬場として使われていた。なお、分割下付された建物は明治神宮に行ったものが戦災で焼失し、他の建物もその後取り壊されるなどしてほとんど現存しない。

現在、赤坂御用地では、春と秋の園遊会会場となる各池周囲の庭園の景観を形成している地区や苑路・車道沿線を含む大半の区域においては、樹木手入れ、芝地手入れ、草刈り除草等の手入れが日常的に行われている。一方、御用地中央部南側の山に庭園の背景となって広がる樹林や菖蒲池西方から権田原門にかけての樹林の多くは、スダジイ、アカガシ、シラカシなどの常緑樹やムク、ケヤキ、モミジなどの落葉樹の混交林で、一部には梅林やヒノキ林などがあるが、梅林を除き、これらの樹林にはあまり手を入れず、基本的に自然の推移に任せた管理を行っている。

## 常盤松御用邸

### 江戸時代

現在の常盤松御用邸の周辺には、江戸時代は大名の下屋敷や武家屋敷があった。御用邸の辺りは 1658 年大和柳本藩主織田家が拝領し、以後久しく織田家下屋敷として続いたが、1808 年越後村上藩内藤家に編入された。1853 年の江戸切絵図を見ると、東隣には高木主水正邸、西北隣には松平左京太夫邸（現在の青山学院の辺り）、その北隣には稲葉長門守邸（現在のこどもの城、国連大学）があったが、南側から西側にかけては吸江寺、金王八幡宮をはじめとする寺といくつかの下屋敷が散在するほか

は、畑や田が渋谷川を挟んで広がっていた。なお、渋谷区郷土資料室によると、明確な記録が存在しないので推測の域を出ないが、江戸下屋敷といっても普段はあまり使われることはなく、立派な屋敷は存在せずに粗末な建物と林や畑があった程度のもが多かったのではないかとのことである。

### 明治以降

明治 15 (1882) 年、宮内省は渋谷村字常盤松の地および同村字氷川裏の地計 13 町 6 反余を、翌年には西隣の字伊勢山の地 4 町 7 反弱を買い上げて皇宮地附属地に編入し、同地は御料地となった。

常盤松の地名は、この地にあった常盤松という松の老巨木に因んで付けられたという。この木には源義経の母常盤御前によって植えられたという伝説がある（世田谷城主の側室常盤が植えたとの説もあるが、いずれも確かなものではない）。大正 14 (1925) 年、同地に区立小学校ができた時、「割れやすい皿ではなく、丈夫な石に」ということで常盤松小学校と名付けられ、昭和 3 (1928) 年町名も常盤松から常盤松に改められたが、御料地、御用邸の呼称は一貫して常盤松を用いている。

これらの地域は隣接して一団地を形成し、当時大部分が桑畑または茶畑であったので、周辺住民等に貸し付け、養蚕製茶等を経営させた。明治 22 (1889) 年、伊勢山を払い下げ、翌年には氷川裏を近衛兵営敷として陸軍省に下賜し、御料地として残ったのは常盤松だけとなった。

明治 30 (1897) 年、常盤松の地は御料乳牛場として主馬寮に移管され、明治 33 (1900) 年から大正 13 (1924) 年までの 25 年間牧場となった。大正 12 (1923) 年末の乳牛場の概要を見ると、面積 12 町余で、うち 7 町が耕地樹林地等、2 町 7 反が宅地道路等、2 町 4 反が放牧地その他となっており、建物は



図 1. 常盤松御用邸と周辺の緑地（大和田守撮影）。

庁舎および官舎が6棟215坪、家畜飼育舎が3棟217坪、倉庫および収穫舎が3棟124坪、雑棟が18棟178坪あった。その頃には、東京の発展に伴って周囲に人家が密集するようになり、衛生上不適当となったということで、御料乳牛場は大正13(1924)年皇居二の丸に移転することとなった。また、当地の一部は大正11(1922)年以降、実践女学校、渋谷区立小学校、東京農業大学などに順次払い下げられた。

大正12(1923)年9月の関東大震災により東伏見宮家が罹災・焼失したため、ほぼ現在の常盤松御用邸に当たる土地が貸与され、翌年から2年かけて同宮邸の殿邸が新築された。当時の図面を見ると、東伏見宮邸の敷地は御料乳牛場の東南の角付近に当たり、建物や放牧地等乳牛場の主要な施設があった場所とは重なっていない。殿邸本館部分からその前面(南側)の庭園のごく一部にかけては乳牛場の構内道路が通っていた箇所重なっているが、庭園となった場所の大部分は牧場内のおそらくは樹林地等であったものと思われる。なお、庭園の状況については資料がなく不明である。

東伏見宮家のご使用は昭和21(1946)年まで続いた後、建物が献納され常盤松御用邸となった。同御用邸は、昭和25(1950)年東宮仮御所となり、昭和38(1963)年義宮御殿となった。その後、昭和51(1976)年秋に現在の常盤松御用邸が新築竣工した。

昭和32(1957)年調整の「常盤松御用邸絵図」を見ると、当時の本館の敷地内における位置と規模は現在の御用邸と多少の違いはあるものの大きく異なるものではなかった。正門は現在の御用邸通用口側にあり、現在の正門からのアプローチ部分は御内庭に含まれ、テニスコートやバラ花壇となっていた。池は形と大きさは現在と多少異なるが、ほぼ同位置にあった。御内庭の池の前面には芝生が広がっており、敷地境界に沿ってスダジイが列植されていた。

現在の常盤松御用邸(図1)の正門からのアプローチ道路沿いは、コナラやクスノキ、モミジなどの多い樹林帯となっている。御内庭は、池の奥側が樹林となっており、一番奥にスダジイとクスノキの大木が茂り、その手前から池周辺にはマツ、ウメ、モッコク、モモ等が植栽されている。

#### 参 考 文 献

- 南紀徳川史刊行会、1923. 南紀徳川史, pp. 849-879.  
渋谷区、1966. 新修渋谷区史上巻, pp. 670-673; 中巻, pp. 1341-1343.  
東京市赤坂区役所、1941. 赤坂区史, pp. 41-108.  
その他宮内庁資料。